

令和五年度文部科学大臣賞審査概要

本年度の文部科学大臣賞の選考は、令和四年四月一日から同五年三月三十一日に至る一年間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関わる著作の中から、まず候補たり得る著作七点を厳選して各委員に確認し、選考委員七名によるそれらの綿密な査読、その結果を持ち寄っての慎重な審議によって行われた。その結果、田中道雄他四名による編著『蝶夢全集』正編及び続編（続編は令和四年十一月二十日、和泉書院刊）を最優秀著作として推薦することに決定した。以下、各委員による推薦書と当日の選考会議をもとに審査概要を記す。

本全集は正編に「発句篇」「文章篇」「紀行篇」「俳論篇」「編纂的著作」「編纂した撰集」を収め、続いて「解題」「文人僧蝶夢」「年譜」「同時代の主な蝶夢伝資料」「蝶夢同座の連句目録」「蝶夢書簡所在一覧」「索引」を付す。続編には、「連句篇」「点巻篇」「書簡篇」「蝶夢追善俳書集」「参与俳人等名録集」「正編の補遺」を収め、続いて「解題」「列島にくまなく蕉風俳諧を」「蝶夢書簡における署名・花押の変遷」「蝶夢伝のための諸資料」「索引」を付す。巻末に「全書簡の年代順による配列表」を載せる。

本書により、全国に遍在する蝶夢の人と作品及び蕉風復興を主とする俳諧活動の全貌を俯瞰することが可能となった。目的・内容ともにスケールの大きな研究で、俳諧史的意義など学術的水準の高さという点においても、本年度の文部科学大臣賞にふさわしい著書である。

田中氏は正編の中で「蝶夢の俳論の核心は『いのち』を詠むということだった」と記す。芭蕉が説く「まこと」の俳諧を実践した蝶夢の俳論と作品群は実に魅力的である。芭蕉という人間が現れ、彼を信奉する弟子達がその教えを書物に残し、全国に広めた。時を経て、蝶夢等が芭蕉関連資料を收集整理して芭蕉の魅力を再び日本国中へ、蕉風復興運動は時代性

を抜きに考えても大変な熱量を必要とした活動であったと思われる。これらの活動があった現在の芭蕉研究がある。蝶夢は本来もつと顕彰されてしかるべきであった。

正統に収める田中氏の蝶夢論二編は、独自のネットワークを形成して活動を続けた蝶夢の企画力と行動力、その社会的俳壇的背景を、資料をもとに具体的に示した貴重な論であり、これからの研究の指針となるであろう。本書は半世紀以上をかけた田中氏の研究に次世代の方々が加わっての編著となっており、研究の継続性の点でも注目に値する。続編に収める四七七通の書簡は圧巻であり、蝶夢の驚異的な芭蕉復興運動を具に語るのみならず、文芸資料として充実した内容を備えており、また、十八世紀後半の世相を知る歴史風俗資料としても価値が高い。

蕉風復興に大きく貢献した蝶夢の俳諧活動の研究は、芭蕉が芭蕉として今の時代に存在価値を持つ、その根源を見つめ直す画期的なもので、俳諧史研究における意義は大きい。『五色墨』を端緒に始まったとされる蕉風復興運動の研究に今後大きな進展が予想され、芭蕉そのものの再発見にもつながるものと期待される。

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 宇城 由文